

# 価値表現の「回り道」の論理について(1)

——単純な価値形態の分析——

尼 寺 義 弘

はじめに

## I 単純な価値形態の分析

1 価値の実体——価値——価値形態

2 単純な価値形態の理論構造

(1) 価値表現の両極

(2) 相対的価値形態

(3) 等価形態

(4) 単純な価値形態の全体

小 結 (以上, 本号)

II ヘーゲルの反省規定 (以下, 次号)

III 価値表現の「回り道」の論理

むすび

## は じ め に

マルクスは貨幣形態の基礎をなす単純な価値形態を分析するにあたってつぎのように述べている。

「すべての価値形態の秘密はこの単純な価値形態のうちにひそんでいる。それゆえこの価値形態の分析には固有の困難がある。」<sup>1)</sup>

この固有の困難を明らかにし、解決を与えたのが価値表現の「回り道」の論理である。われわれは以下においてその論理を究明することにしよう。そのためにつぎのような順序で検討する。

従来、「回り道」についての議論は、「回り道」というその言葉が『資本論』で使用されている個所<sup>2)</sup>のみが主として問題とされてきた観がある。

そこでまず、I「単純な価値形態」の全体について逐一検討を加え、そのトータルな把握を試みる。

つぎに、II ヘーゲルの「反省規定」との関係について考察する。価値形態論でマルクスが特にヘーゲル論理学を意識していることは周知のことである<sup>3)</sup>が、「回り道」との関係でいえば「本質論」の「反省規定」が根本的に再検討されねばならないものである。

最後にI、IIを前提して、III「回り道」についての諸説をとりあげ分析を加える(注)。

(注)

「回り道」をめぐる論争は周知の宇野・久留間両氏のそれ以来かなりの文献をかぞえることができる<sup>4)</sup>。Iではそれらの論争点には立ち入らないでマルクス自身の論理を追求する。論争史および論争点についてはIIIで整理し、究明する。

なお問題の性質上Iでは、『資本論』は主として「現行版」を対象として取りあげ、「初版」、「再版」および「各国語版」についてはIIIで取りあげる。

1) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I., S. 63.

2) Ebenda, S. 65. u., *Das Kapital*, Bd. I., 1. Auflage, S. 20., 30.

3) 拙著『価値形態論』第8章「ヘーゲル判断論とマルクス価値形態論」青木書店, 1978年, 参照。

4) 佐藤金三郎ほか編『資本論を学ぶ』I, 有斐閣, 1977年, 174頁。山本広太郎「単純な価値形態について」, 『経済学雑誌』第76巻第3号, 1977年, 52頁。藤本義昭「価値形態の秘密について」, 『大阪市大論集』第30号, 1978年, 3頁。

## I 単純な価値形態の分析

### 1 価値の実体——価値——価値形態

マルクスは、現行版『資本論』では、第1巻第1編第1章「商品」の第3節「価値形態または交換価値」において商品のとる社会的形態について

論じている。商品の自然的形態は人間の眼に見えるありのままの使用対象という姿態である。それは具体的に感覚しうる使用価値の形態・商品体(Warenkörper)である。

ところが、商品の社会的形態である価値形態は1商品それ自体を子細に見ても、あるいはその商品を手に取ってみてもけっして具体的に把握することはできない。なぜなら商品の価値形態の本質である価値が自然的なものではなくて、それと正反対のもの、社会的なものであるからである。すなわち商品の価値は抽象的人間労働という商品世界の「社会的単位(gesellschaftlichen Einheit)」<sup>1)</sup>の結晶であり、商品世界の社会的な紐帯をなすものである。したがって価値は1商品にふくまれてはいるが、けっしてその商品それ自体において具体的に感覚されるものではない。つまり社会的なもの(価値)がその担い手である自然的なもの(使用価値)で直接に「これが価値である」と表現されることはありえないのである。だから価値の現象形態である価値形態も1商品それ自体を孤立的にみたのではけっしてそれをつかまえることはできないものである。

ところで、どうにもつかまえない価値なるものはどのようにして把握されたのであろうか。それは二商品の交換関係において現われる「交換価値」を分析者の頭脳における抽象力によって析出したものである。すなわち、「交換価値(価値形態)→価値→価値の実体」というプロセスをたどることによって得られたものである。マルクスはつぎのように述べている。

「研究の進行は、われわれを、価値の必然的な表現様式または現象形態としての交換価値につれもどすことになるであろう。しかし、さしあたり価値はこうした形態にはかわりなしに考察されねばならない。」<sup>2)</sup>

すなわちまず商品の交換価値より価値を純粹に分離し、つぎに価値をその実体にまで分析するのである。価値の実体は抽象的人間労働である。抽象的人間労働は商品世界における労働の同等性を、つまり社会性をなして

いる。その労働の結晶が商品の価値である。だから価値は「純粹に社会的(rein gesellschaftlich)」<sup>3)</sup>なものである。だから商品の価値は同じ「幻のような対象性(gespensige Gegenständlichkeit)」<sup>4)</sup>あるいは「一つの思惟物(ein Gedankending)」<sup>5)</sup>と言われるようにけっして直接に眼で見、手で触れることのできないものである。

マルクスは交換価値の分析について「アードルフ・ヴァーグナー著『経済学教科書』への傍注」においてつぎのように述べている。

「もし、ロートベルトウスが……さらにすすんで諸商品の交換価値を分析したとすれば、——というのは、交換価値は複数の諸商品が、種々の商品種類が、見いだされるところにのみ存在するのだから——、彼はこの現象形態の背後に『価値』を見いだしたのであろう。もし彼がさらにすすんで価値を研究したならば、彼はさらに、ここでは物(das Ding)は、『使用価値』は、人間労働の単なる対象化として、同等な人間労働力の支出として認められ、したがってまたこの内容は物(der Sache)の対象的性格として、物それ自身に物的に(sachlich)属する〔性格〕として表示されているということ——もっともこの対象性はその自然的形態においては現象しない{だがこのことが特別な価値形態(eine besondere Wertform)を必要ならしめるのである}——を発見したのであろう。したがって彼は、商品の『価値』は、他のあらゆる歴史的社會形態においても——価値とは異なった形態においてであるが——同様に存在するものを、すなわち『社会的』労働力の支出として存在する かぎりにおける労働の社会的性格(gesellschaftlicher Charakter)を、単に一つの歴史的に発展した形態において表現するものにすぎない、ということを発見したのであろう。」<sup>6)</sup>

さて純粹に社会的なものとしてとらえられた商品の価値なる概念はその定在様式(表現形態)をもたなければならない。すなわち価値は「幻の対象性」ではなくて「現世の対象性」に、「思惟物」ではなくて「実在物」にならねばならないのである。それを論究するのがつぎにみる価値形態論

である。マルクスは述べている。

「われわれは、じっさい、諸商品の交換価値または交換関係から出発して、そこに隠されている価値を追跡したのである。いま、われわれは再び価値のこの現象形態に帰らなければならない。」<sup>7)</sup>

すなわち、「価値の実体→価値→価値形態」という上向への旅である。

- 1) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 62.
- 2) Ebenda, S. 53.
- 3) Ebenda, S. 62.
- 4) Ebenda, S. 52.
- 5) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, 1. Auflage, S. 17.
- 6) K. Marx, [*Randglossen zu Adolph Wagners „Lehrbuch der politischen Ökonomie“*], M-E-W, Bd. 19, S. 375.
- 7) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 62.

## 2 単純な価値形態の構造理論

さて商品の価値は商品所有者の欲望の対象というような純粋に自然的なものではなくて、商品世界の普遍性(交換可能性)を表現する純粋に社会的なものである。だから商品の価値は自分自身の現象形態をもたねばならない。すなわち商品の価値は自分自身の担い手であるその商品の使用価値ではけっして表現することができないので他商品との関係において自分自身の定有する姿態をとらねばならないのである。マルクスはそのことを「A 単純な価値形態」で詳細に論究しているのである。

ところで、現行版『資本論』の「A 単純な価値形態」はつぎのように四つの部分からなりたっている。(現行版『資本論』原書[M-E-W, Bd. 23.]で A は全部で14ページである。)

- (1) 価値表現の両極
- (2) 相対的価値形態

〔a〕 相対的価値形態の内実

〔b〕 相対的価値形態の量的規定性

(3) 等価形態

(4) 単純な価値形態の全体

Aの理論構造をその形式からみると、まず(1)単純な価値形態を担う両極の形態規定を与え、つぎに(2)価値形態を相対的価値形態から考察し、さらに(3)それを等価形態から考察し、最後に(4)価値形態の全体をみているのである。

以下において、(1)より順次みていくことにしよう。

### (1) 価値表現の両極

(1)は単純な価値形態の導入部であり、相対的価値形態と等価形態という価値表現の両極の異なる役割について一般的に述べている。すなわち、リンネル＝上着 において「リンネルは自分の価値を上着で表現しており、上着はこの価値表現の材料として役だっている。第1の商品は能動的な、第2の商品は受動的な役割を演じている。」<sup>8)</sup>

さらに両極は「互いに属しあい、互いに制約しあっている不可分な契機(Momente)である」。<sup>9)</sup>そして1商品が同時に両方の形態をとりえないという意味で両極は「互いに排除しあう、または対立する両端(Extreme)」<sup>9)</sup>である。

このように、(1)では価値表現の両極の形態上の区別と両極の「反省関係」<sup>4)</sup>について述べている。それに関連して形態Ⅱから形態Ⅲへの移行の論理展開において重要な役割を演ずる価値表現の両極の「逆の連関」<sup>5)</sup>についても論じられている。

1), 2), 3) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, S. 63.

4), 5) 拙著『価値形態論』第3章「価値表現の分極性」および第四章「価値表現の両極の『逆の連関』について」参照。

## (2) 相対的価値形態

(2)は〔a〕「相対的価値形態の内実」と〔b〕「相対的価値形態の量的規定性」とに分かれている。〔b〕は「商品の相対的価値の運動に関する展開された諸法則」<sup>1)</sup>を述べているだけであり、「これらの法則は、すべて、諸商品の価値量はそれらの商品の生産に必要な労働時間によって規定されている、ということにもとづいている。」<sup>2)</sup>したがって、〔b〕は価値表現の「形態内実」<sup>3)</sup>に直接には触れないのでここではとりあげない。

さて、〔a〕は価値表現の「形態内実」を自分の価値を表現しようとする相対的価値形態の商品の側面から明らかにするものである。従来の「回り道」をめぐる論争も〔a〕を中心としておこなわれてきている。そこで〔a〕を各パラグラフごとに逐一考察することにしよう。(なお〔a〕は全体で11のパラグラフに分かれている。以下、便宜上、最初のパラグラフから〔イ〕……〔ル〕という符号をつけることにする。)

〔イ〕、〔ロ〕ではまず2商品の価値関係(Wertverhältnis)の量的側面が度外視される。すなわち「価値量としてはリンネルも上着も同じ単位(Einheit)の諸表現であり、同じ性質(Natur)の諸物(Dinge)である」。『リンネル=上着』というのが等式の基礎(die Grundlage)である。価値として2商品とも同一のものである。だからそれらが質的に等置される(qualitativ gleichgesetzt)のである。

〔ハ〕つぎに質的に等置された商品のうちリンネルの価値だけが表現される。「では、どのようにしてか(Und wie?)」

「リンネルが上着にたいして自分の『等価物(Äquivalent)』または自分と『交換されうるもの(Austauschbares)』として関係(Beziehung)することによってである。この関係(Verhältnis)のなかでは、上着は価値の実存形態(Existenzform)として、価値物(Wertding)として認めら

れる。というのはただこのような価値物としてのみ上着はリンネルと同じだからである。他面では、リンネルそれ自身の価値存在(Wertsein)が現われる。すなわち独立した表現を得る。というのはただ価値としてのみリンネルは上着にたいして同等な価値あるもの(Gleichwertiges)としてまたは自分と交換されうるものとして関係する(bezüglich)からである。」

ここで価値表現の「回り道」のメカニズムがはじめて明らかにされる。すなわちリンネルの価値はリンネルが上着にたいして「自分の等価物」または自分と「交換されうるもの」として関係することによって表現されるのである。それはリンネルが価値として上着にたいしてとる関係、すなわち「価値関係」によってである。そのことによってリンネルの価値は独立した表現が与えられるのである。そして上着はこの関係のなかでは「価値の存在形態」として、「価値物」として認められるのである。

さらに上述の関係のアナロジーとして化学における酪酸と蟻酸プロピルとの等置関係について述べている。すなわち(C<sub>4</sub>H<sub>8</sub>O<sub>2</sub>)という酪酸の化学的実体がその物体形態と区別されて表現される仕方を論じている。

〔ニ〕価値=「価値抽象(Wertabstraktion)」——(人間労働の凝固)と「価値形態」——(他商品にたいする関係によって現われる)との区別。

〔ホ〕この部分で「回り道(Auf diesem Umweg)」という言葉がでてくる重要な個所なので全文をまず引用する。

「たとえば上着が価値物(Wertding)としてリンネルに等置されることによって、上着にふくまれている労働はリンネルにふくまれている労働に等置される。ところで、たしかに上着をつくる裁縫労働はリンネルをつくる織布労働とは種類の違った具体的な労働である。しかし織布労働との等置は裁縫労働を、事実上、両方の労働に現実に同等なもの(wirklich Gleiche)へ、人間労働という両方に共通な性格(gemeinsamen Charakter)へ還元する。こうした回り道(Auf diesem Umweg)において、その場合(dann)言われていることは、織布労働もまたそれが価値を織るかぎ

りでは、それを裁縫労働から区別する特徴を何らもってはいないということ、つまり抽象的人間労働であるということである<sup>4)</sup>。ただ異種の諸商品の等価性の表現 (Äquivalenz Ausdruck) だけが価値形成労働の独自の性格を顕在化させるのである。というのは、この等価性の表現は異種の諸商品のうちにひそんでいる異種の諸労働を、実際に、それらに共通するものへ、人間労働一般に還元するからである。」

リンネルの価値が上着によって表現される価値形態において、リンネルの「価値を織る」織布労働が価値形成労働であるという独自の性格を表現する迂回的方法が上のように述べられている。それは異なる商品の等価性の表現に根拠をもつものである。すなわち異なる商品が等価であるということ＝は、労働においても質の区別のない「人間労働一般」に還元しているからである。一商品が他商品を「価値物」として等置することによって自分の価値を表現すること、つまり「回回道」による価値表現によって同時にリンネル価値をつくる織布労働も抽象的人間労働であるということが迂回して語られているのである。すなわち〔ハ〕で述べた二商品の価値関係における価値表現を、〔ホ〕は価値を形成する労働という根本的な視角から論じているのである。〔ハ〕、〔ホ〕によって「回回道」の論理は相対的価値形態の側面から明らかにされているといえるであろう。

〔ヘ〕は、〔ホ〕における等価性の表現による価値形成労働の表現だけでは不十分であることを述べている。なぜなら価値をつくる人間労働と人間労働の凝固としての価値とは区別しなければならないからである。そして価値を労働の凝固として表現するためには他商品との価値関係において両方の商品に「共通な対象性 (Gegenständlichkeit)」として表現されねばならない。だがこの課題は〔ハ〕によってすでに解決されている。

〔ト〕等価形態の上着がもつ独自の性格について述べている。すなわちリンネルとの価値関係のなかでは上着は「価値がそれにおいて現われる物 (Ding) または手でつかめるその自然的形態で価値を表示している物とし

て認められるのである」。その関係を離れば、上着は単なる使用価値であるにすぎないものであるのに。

〔チ〕も等価形態の上着のもつ独自の性格について述べている。「リンネルの価値関係のなかでは、上着はただこの面〔人間労働の堆積——引用者〕からのみ、したがってただ具体化された価値 (verkörperter Wert) としてのみ、価値体 (Wertkörper) としてのみ認められるのである。」

「上着がリンネルにたいして価値を表示するということは、同時にリンネルにとって価値が上着という形態をとることなしにはできないことである。」

すなわち商品の価値は価値それ自体で一人歩きすることはできないことである。1商品の価値は必ず他商品の使用価値という姿をとってのみ現象しうるのである。このことは「王様」の概念が一人歩きできないのと同様である。すなわち王様なるものは特定の顔つきや髪をもった個人の姿をとってしか登場できないものである。

〔リ〕「上着がリンネルの等価物となっている価値関係のなかでは上着形態は価値形態として認められる。したがって商品リンネルの価値が商品上着の肉体 (Körper) で表現され、1商品の価値が他商品の使用価値で表現される。」

リンネルは価値として「上着と同等なもの (Rockgleiches)」であり、価値は上着にみえるのである。「リンネルの価値存在 (Wertsein) が上着との同源性 (Gleichheit) に現われる」。こうしてリンネルは自分の自然的形態とは異なる価値形態をうけとるのである。なおマルクスはアナロジーとしてキリスト教徒の羊的性質 (Schafsnatur) が神の仔羊との同源性 (Gleichheit) に現われることを述べている。

〔ヌ〕この部分はa「相対的価値形態の内実」の総括である。すなわち第1節「商品の二要因」、第2節「労働の二重性」で分析者の立場から論じられた商品価値の分析を、リンネル自身が上着との価値関係において自分

にだけ通用する言葉 (Sprache) で表現するのである。つまりリンネルは「自分の思想 (Gedanken)」を「商品語 (Warensprache)」で語るのである。

「労働は人間労働という抽象的屬性 (abstrakten Eigenschaft) においてリンネル自身の価値を形成するということを言うために、リンネルは、上着がリンネルと同等に妥当する (gleichgilt) とされるかぎり、つまり価値であるかぎり、上着はリンネルと同じ労働から成っていると言うのである。リンネルの崇高な価値対象性 (Wertgegenständlichkeit) が自分のゴワゴワした肉体と異なることを言うために、リンネルは、価値は上着に見え、したがってリンネル自身も価値物 (Wertding) として上着とうり二つである、と言うのである。」もちろん「商品語」はしゃれである。

さらに価値表現のための商品語 (Wertsein [〜に値する]) はロマン語 (valere, valer, valoir) よりも適切ではない。

〔ル〕「内実」の結論である。「価値関係の媒介」によって、商品Bの自然的形態 (肉体) が商品Aの価値形態、価値鏡 (Wertspiegel)<sup>(注)</sup> となる。

「商品Aが商品Bに〔自分の――引用者〕価値体 (Wertkörper) として、人間労働の物質化として関係する (bezieht) ことによって、商品Aは使用価値Bを自分自身の価値表現の材料にする。商品Aの価値はこのように商品Bの使用価値で表現されて相対的価値の形態をもつのである。」

(注)

マルクスは「価値鏡」の脚注として、人間ベテロと人間パウロの関係をとりあげ論じている。

「人間ベテロは彼と同等なもの (seinesgleichen) としての人間パウロに関係することによってはじめて人間としての自分自身に関係するのである。しかしそれとともにまたベテロにとって、パウロの全体が、そのパウロ的な肉体のままで人間という種族 (Genus Mensch) の現象形態として認められるのである。」

1), 2) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, 1. Auflage, S. 20-21.

3) 拙著『価値形態論』第八章「ヘーゲル判断論とマルクス価値形態論」参照。

4) 「回り道」の部分の翻訳上の問題はつぎの文献を参照されたい。武田信照「価値形態論と交換過程論」(中)愛知大学『法経論集』『経済経営篇』第76号, 1974年。

### (3) 等価形態

(3)は価値形態を等価形態の側面よりみたものである。それは17のパラグラフ ([イ]……[レ]) よりなりたっている。(2)相対的価値形態 と同様に逐一検討することにしよう。

〔イ〕 等価形態の根拠は「1商品A (リンネル) がその価値を異種の1商品B (上着) の使用価値で表示する」ということにある。リンネルは、自分の価値存在を上着がその自然的形態のままでリンネルに「同等に妥当する (gleichgilt)」ということによって表現する。つまり上着はリンネルと直接に交換されうる形態にある。「したがって1商品の等価形態は、その商品の他の商品との直接的交換可能性 (unmittelbaren Austauschbarkeit) の形態である。」

〔ロ〕, 〔ハ〕 他商品との「直接的交換可能性」という独自の属性をもつ等価形態の商品は、それ自身価値量として表現される形態をもたない。なぜなら上着の一定量という生身のままの自然的形態でリンネルの一定の価値量を表現しているからである<sup>(注)</sup>。すなわち上着はリンネルとの価値等式において「等価物の役割を演じ」、「価値体」として認められているので自分の価値量としての表現形態をもつことはできないし、もつ必要もないのである。したがって「1商品の等価形態はむしろ量的な価値規定をまったくふくんでいないのである。」

(注)

マルクスはここで価値表現のうちに「単なる量的関係」だけをみるベリリーなどの「皮相な理解」の根拠を明らかにするのである。

〔ニ〕 等価形態の第1の特性 (Eigentümlichkeit) は、「使用価値がその反対物の、価値の現象形態となる」ということである。以下、〔ホ〕, 〔ヘ〕, 〔ト〕はその説明である。

〔ホ〕「商品の自然的形態が価値形態となる。」この取り違え (Quidpro-

quo)がおこるのは、リンネルが上着にたいしてとる「価値関係」のなかだけのことである。すなわち「どのような商品も、自分自身にたいして等価物として関係することはできないのであり、したがってまた、自分自身の自然の皮を自分自身の価値の表現とすることはできないのであるから、その商品は他の商品にたいして〔自分の――引用者〕等価物として関係しなければならない。すなわち他の商品の自然の皮を自分自身の価値形態にしなければならないのである。」

〔へ〕は〔ホ〕のアナロジーとして「重量尺度 (Gewichtsmaß)」の例をあげている。棒砂糖の重さを表現するために、われわれはそれを鉄との重量関係 (Gewichtsverhältnis) におく。この関係のなかでは鉄は「重さ以外のなにものをも表示していない物体 (Körper) とみなされる」。鉄は「重さの姿、重さの現象形態を代表する」。価値表現においては「上着体はリンネルにたいしてただ価値だけを代表する。」

〔ト〕だが、〔へ〕はあくまでアナロジーである。鉄は「自然的属性」である「重さ」を代表している。上着は「超自然的属性 (übernatürliche Eigenschaft)」である価値を、「純粋に社会的なもの (rein Gesellschaftliches)」を代表しているのである。

〔チ〕相対的価値形態は、リンネル商品の価値をその使用価値とは区別されたもの、「上着に等しいもの (Rockgleiches)」として表現する形態であるから、それは「ある社会的関係 (ein gesellschaftliches Verhältnis)」をふくんでいることを暗示している。

等価形態はこれとはまったく正反対である。等価形態はそのあるがままの商品体が価値を表現し、「生まれながらに価値形態をもっている」という形態である。もちろんこの形態はリンネルの上着にたいする価値関係のなかでのみ得られたものである。(注)

(注)

マルクスはこの部分の(注)で等価形態の独自の性格について、王と臣下との反省関係をアナロジーとしてあげている。

しかし上着のもつ直接的交換可能性という等価形態の属性は、「重さがあるとか保温する」とかいう上着の自然的な諸属性と同様に、生まれながらもっているかにみえる。ここに等価形態の、したがってその完成された形態である貨幣の「謎性 (das Rätselhafte)」がある。経済学者たちは単純な価値表現がこの謎を解くものであることに気がついていない。

〔リ〕,〔ヌ〕,〔ル〕は等価形態の第2の特性――「具体的労働がその反対物の、抽象的人間労働の現象形態になる」ということを述べている。

〔リ〕等価商品の体はその生まれながらの姿で価値体である。つまり上着は抽象的人間労働の「物体化 (Verkörperung)」として認められる。だから上着をつくる裁縫労働という具体的労働は直接に抽象的人間労働の「実現形態 (Verwirklichungsform)」である。リンネルの価値表現において裁縫労働の「有用性 (Nützlichkeit)」はリンネルの「価値鏡 (Wertspiegel)」をつくることにある。

〔ヌ〕裁縫労働においても、織布労働においても人間の労働力が支出される。だからいずれの労働も人間労働という一般的属性をもっている。これは何も神秘的なことではない。ところが価値表現においては「事態はねじまげられてしまう」。すなわち織布労働がリンネル価値を形成するということ表現するために「織布労働にたいして裁縫労働が抽象的人間労働の手でつかめる実現形態として対置される (gegenübergestellt) のである。」

〔ル〕したがって具体的労働(裁縫労働)が抽象的人間労働の現象形態となるのである。

〔オ〕等価形態の第3の特性――「私的労働がその反対物の形態すなわち直接に社会的な形態にある労働になる」を述べている。裁縫労働が人間労働の表現として認められることによってそれは他の労働との「同等性の形態 (die Form der Gleichheit)」をもつ。したがって裁縫労働は、他のすべての商品生産労働と同様に、私的労働でありながらも直接に社会的形態にある労働である。つまり労働の同等性が社会性を表現する商品

生産の社会では、裁縫労働の生産物は他の商品と直接に交換されうる生産物、社会的労働の生産物となって現われる。<sup>(注)</sup>

(注)

初版『資本論』の「付録」では、等価形態の第4の特性として呪物性論がとりあげられている<sup>1)</sup>。

〔ワ〕、〔カ〕、〔ヨ〕、〔タ〕、〔レ〕は等価形態の第2、第3の特性についてアリストテレスという天才による「価値形態」にたいする思考方法を参考としながら読者の理解を深めさせようとしている。

〔カ〕 アリストテレスは商品の貨幣形態は単純な価値形態の展開された姿であることを述べている。

「5台の寝台＝1軒の家」

↓

「5台の寝台＝これこれの額の貨幣」

〔ヨ〕 アリストテレスは、「5台の寝台＝1軒の家」において、「家が寝台に質的に等置される」ことを必要とすること、そして寝台と家という異なった物が互いに関係しうるためにはこうした「本質の同等性(Wesensgleichheit)」が必要であることをみぬいている。

しかし彼はこれ以上の分析をやめる。彼によれば異なるものが「質的に同等である」ということは不可能なことである。ただ「実際上の必要のための応急手段」でしかありえないと。

〔タ〕 アリストテレスの分析の失敗はどこにあるのか。それは「価値概念(Wertbegriff)の欠如」にある。すなわち「寝台の価値表現において家が寝台にたいして表わしている共通な実体(die gemeinschaftliche Substanz)は何であるのか？」彼はそうした同等なものは「真実には存在しえない」という。そしてこの同等なものこそ人間労働なのである。

〔レ〕 アリストテレスは何故に人間労働を見いだすことができなかったのか？ それはギリシアの社会が奴隷労働によって成りたち、人間やその労働力の不等性(Ungleichheit)をその自然的基礎(Naturbasis)として

いたからである。

「価値表現の秘密(Geheimnis)、すなわち人間労働一般であるがゆえの、またそのかぎりでの、すべての労働の同等性と同等な妥当性(gleiche Gültigkeit)は、人間の同等性の概念がすでに民衆の先入見としての強固さをもつようになったときに、はじめてその秘密を解かれることができるのである。」しかしそれは商品形態が労働生産物の一般的形態である社会においてのみ可能なことである。

1) K. Marx, *Das Kapital*, Bd. I, 1. Auflage, S. 773-775.

#### (4) 単純な価値形態の全体

(4)は7つのパラグラフ(〔イ〕……〔ト〕)に分かれている。これまでと同様に順次みていくことにしよう。

〔イ〕 商品の価値形態は他の商品にたいするその商品の価値関係または交換関係(Austauschverhältnis)にふくまれている。すなわち「商品Aの価値は、質的には、商品Bの商品Aとの直接的交換可能性によって表現される。商品Aの価値は、量的には、一定量の商品Bの与えられた量の商品Aとの交換可能性によって表現される。」こうして商品Aの価値はその自然的形態とは独立して表現され、いわゆる「交換価値」という形態をもつことになるのである。

〔ロ〕 「商品の価値形態または価値表現は商品価値の本性(Natur)から生じてくるのであって、逆に価値や価値量がそれらの交換価値としての表現様式から生じてくるのではない。」ところが、重商主義者も近代の自由貿易行商人もともにこれとは逆の考えをもっている。そして前者は等価形態に、後者は相対的価値形態に重点をおいている。

〔ハ〕 商品Aの商品Bでの価値表現の分析はつぎのことを明らかにした。商品Aの自然的形態はただ使用価値の姿態として、商品Bの自然的形



価値表現の「回りの道」の論理について(1)

45

態はただ価値形態または価値姿態(Wertgestalt)として認められる。したがって「商品に包みこまれている使用価値と価値との内的な対立(innere Gegensatz)は一つの外的な対立(äußeren Gegensatz)によって、すなわち二つの商品の関係(Verhältnis)によって表示される」。だから「一商品の単純な価値形態はその商品にふくまれている使用価値と価値との対立の単純な現象形態である。」

〔二〕労働生産物はその生産に支出された労働をその物の「対象的」な属性として、その物の「価値」として表示するような発展段階においてのみ商品となることができる。「それゆえ、商品の単純な価値形態は同時に労働生産物の単純な商品形態であり、したがってまた商品形態の発展は価値形態の展開に一致する(zusammenfällt)ということになる。」

〔ホ〕,〔ヘ〕,〔ト〕は、単純な価値形態という萌芽形態(Keimform)の「不充分性(Unzulängliche)」を明らかにし、「全体的な価値形態」への展開・移行の条件について述べている。

〔ヘ〕単純な価値形態は人間労働の結晶である価値の本性(概念)の表現形態として不充分である。それは相対的価値形態および等価形態からみていえることである。すなわち単純な価値形態はほかのすべての商品との「質的な同等性と量的な比率性(qualitative Gleichheit und quantitative Proportionalität)」を表示してはいない。また等価商品はただ一つの商品にたいしてだけ直接的交換可能性の形態をもつ個別的な(einzelne)等価形態である。

〔ト〕ところで、個別的な(einzelne)価値形態は一商品の価値が他の一商品の使用価値で表現される価値形態であるが、その価値鏡となる等価商品はそれがどのような種類のものであってもよい。「商品Aが他のあれこれの商品種類と価値関係をむすぶ(in ein Wertverhältnis tritt)のに応じて同じ一つの商品のいろいろな単純な価値表現が生ずるのである。」こうして商品Aは商品世界の無数の商品種類で表現されることとなり、「全体

46

阪南論集 第14巻第5号

的な価値形態」へ移行するのである。

## 小 結

以上のように現行版『資本論』にしたがって「単純な価値形態」に逐一検討を加えてきた。それを簡単にふりかえってみると、マルクスはまず 1) 単純な価値形態を成り立たせる両極の相互関係を考察し、つぎに 2) その価値形態を相対的価値形態から分析し、さらに 3) それを等価形態から明らかにし、最後に 4) 全体の視点からみているといえる。

さて各パラグラフの綿密な検討の結果として現行版『資本論』の価値表現の「回りの道」のメカニズムはつぎのように述べるであろう。{2)の〔ハ〕,〔ホ〕,〔リ〕,〔ル〕,3)の〔イ〕,〔ホ〕,4)の〔イ〕}

一商品の価値は他商品の使用価値で表現されるのであるが、その論理はまず 1) 一商品が他商品を価値物として等置し, 2) 価値物である他商品の使用価値で表現することである。

あるいは同じことであるが, 1) 1商品が他商品と価値関係をむすびその他商品を価値鏡たらしめて, 2) 価値鏡である他商品の自然的形態で表現するということである。

こうして一商品は相対的な価値の形態をもつことができるのである。

すなわち一商品は 1) のプロセスで他商品に「等価物」という等価形態の独自の経済的形態を与える。そして 2) その形態規定をもった他商品で価値表現するのである。もちろん1), 2)のプロセスは時間的な順序を述べているのではない。時間的には1), 2)のプロセスとも同時におこなわれるものである。論理として価値表現の「回りの道」を説くとすれば, 1), 2)という二つの段階に分けて論ずることが必要であると考ええる。以上のことが価値表現の「回りの道」といえるであろう。

従来のところ「回りの道」をめぐる論争は主としてその言葉のある(2)の

価値表現の「回り道」の論理について (1)

47

〔ホ〕の部分だけが論じられてきている。だがその部分だけの理解では不十分である。〔ホ〕は、すでに述べたように、価値形成労働の独自性の表現の仕方について述べているのである。それももちろん「回り道」の価値実体にまでさかのぼった理解であるといえよう。そしてマルクスもアリストテレスの例を出して価値概念との関係を強調している。

だが商品の価値の独自の表現形式である「回り道」は「単純な価値形態」の全体を十分に理解したうえで純粋に表現形式として論じなければならない問題であるといえる。(未完)

(1978年12月20日)